日本IT書紀

030 興廃在此一戦

佃 均

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は
https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。

第三十

興廃在此一戦

一

幕末以来の景色や文物に「西洋」の文物が混在する和洋混淆から、和洋折衷への動きが加速された事情を考えると、やはり日清、日露の二つの戦争を無視するわけにはいかない。例えばそれは、大宅壮一がのちに満州事変を野球に仮託して評論したことに準じれば、たぶんこういうことである。

小学校にはいったばかりの子どもたちが、とにもかくにも「野球」というものをやろうとチームを作った。「野球」というのは概ねこういうものだと分かっているのだが、練習をするにもルールが分からない。ボールもバットもミットもベースもなかったので、それぞれの家から思い思いに使えそうなものを持ってきた。

隣の町から、ちょっとは「野球」というものを知っている人にきてもらって、コーチをしてもらった。子どもたちは意外に物覚えが良かったので、どうにかこうにか格好がついてきた。

数年たつと体も大きくなったし、腕力、脚力もついてきた。みんなでアルバイトをしてバットやミットを買い揃えた。自前の球場もできたし、審判も養成した。

実力派草野球に毛が生えた程度のレベルに過ぎなかったが、周りの先輩たちが、「チーム」として認めてくれるようになった。この場合でいえば、差し当たり「大日本チーム」が古豪「清チーム」「露チーム」と一戦を交えることになった。

日清戦争（一八九四年）は、朝鮮半島の独立をめぐる清帝国と日本の対立が引き金になった。

歴史をたどれば、坂本龍馬が「日本は朝鮮国、中国などと連合して、大清帝国やヨーロッパ列強と対抗すべきである」と論じ、高杉晋作が上海にまで赴いて太平天国を指向したことにさかのぼる。

龍馬、晋作は朝鮮国の独立運動を、

——応援すべきである。

と論じたが、それは同じアジアの未開国としてともに連携し、西欧列強に対抗し支配から脱皮するという視点だった。ところが幕末維新の生き残りたちは、大日本帝国の領土拡張論にすり替えた。その第一は征韓論、第二は一八八五年の天津条約である。

西欧列強の圧力が強まるにつれて、朝鮮半島でも日本の幕末と同じように攘夷論が沸き起こった。当面の攻撃が開港協定と不平等条約を締結した李王朝に向けられたのも、攘夷論が倒幕論と結びついた日本における経過と等しい。

ただ日本では幕府対朝廷の構図があって、天皇という超法規的存在がある意味で緩衝役を果たした。李王朝にはそれがなかった。

ばかりでなく、李王朝は軍兵を持っていなかった。宮殿に控えていたのは門を守る衛兵と儀式を彩どる儀仗兵ばかりで、その数は二千に満ちていなかった。そういうわけで国内に反乱が起こったとき、王朝の官僚は慌てふためき、これまでの習慣に従って中国に泣きついた。

清帝国が朝鮮国を属国とみなしていたのは、「冊封」を前提とする中華思想において当然のことだったし、事実、朝鮮の李王朝も中国中華思想の中で安穏を得ていた。

これに対して日本帝国が

――朝鮮国の自主・中立性を認め、独立を認めよ。

と清帝国に迫ったのは、すでにして朝鮮国への内政干渉にほかならなかった。東学党の乱に際して李王朝が清帝国に援軍を求め、それを阻止せんとして日本帝国が陸戦兵一個旅団を仁川に上陸させたのが日清戦争の始まりとなったのだが、当の東学軍は

――斥倭洋倡義。

の旗を掲げていた。彼らの目に日本は「洋」と同じように祖国を侵略しようとしている敵に見えていた。

海戦は一八九四年（明治二十七）の九月十五日、午後零時五十分から始まった。戦史上、日本では「黄海海戦」、中国では「仁川沖海戦」と呼ぶ。これで勝敗の趨勢が決まった。

清朝の海軍は当時、アジア最大の戦艦「定遠」「鎮遠」を中核に、計十二隻で日本海軍と対峙した。日本海軍の主力は戦艦「吉野」「松島」「橋立」など隻数では同じだが、「定遠」「鎮遠」に匹敵する砲艦がなかった。清朝海軍が誇る二隻の戦艦に搭載されていた三十センチ砲が火を吹けば、日本海軍の「松島」「橋立」ですらたちまち撃沈することを免れ得なかった。

それが勝った。

子どもの草野球チームが、商店街の大人のチームに勝ったようなものである。

これが自信を植え付けた。

二

日露戦争（一九〇四）もまた、海戦が勝敗を決めた。

こればかりは誰が見ても日本の負けだった。何せ相手は実業団のチームだから、遠征で疲労が癒えていないとはいえ、子どもの草野球では敵うはずがなかった。双方の海戦兵力を見ると、そのことがよく分かる。

ロシアの第二太平洋艦隊（いわゆるバルチック艦隊）は計三十八隻である。うち最大は一万三千五百トンの戦艦三隻、さらに一万トンの戦艦が五隻。砲力は十二インチ砲二十六門、十インチ砲七門、九インチ砲および八インチ砲二十五門、六インチ砲百五十九門。

対する日本艦隊は一万五千トン級戦艦三隻が中核だが、艦船数は二十八、砲力は十二インチ砲十二門、十インチ砲一門、八インチ砲三十四門、六インチ砲二百四門。

砲力においてロシア艦隊が勝り、かつ戦闘経験では圧倒的な優位にある。

――ロシア艦隊の勝利は動かない。

とするのが国際的な見かただった。

このために日本帝国陸軍は、ロシア艦隊が到着する前に何が何でも旅順港を制圧しようとし、乃木希典をして無慮な攻撃を繰り返した。日清戦争のとき、乃木が率いた軍団は一日にして旅順を攻略したが、それから十年の間にロシア軍は大量のコンクリートを打ち、壕を掘り、そこに大砲と機関銃を持ち込んで〝東洋一〟の要塞を造り上げていた。しかも山の木を伐り倒し、攻撃してくる兵に身を隠す場所を与えない工夫を施した。

帝国陸軍がそのことを知らなかったわけではなかった。しかしどれほどの装備であるかまでは計り知れなかった。このために悲劇的な戦闘が繰り広げられた。

突撃する日本の兵士は屍を越えてさらに突撃して斃れていった。元込めの旧式銃と機関銃では勝負にならなかった。あまつさえロシア軍は要塞の周りに二重三重の鉄条網を張り巡らし、そこに高圧電流を流してもいた。

攻め倦(あぐ)んでいたとき、

――港が見える。

という報せがもたらされた。

軍略地図上に「二〇三」と符号が打たれた小高い山の頂から、はるか遠方に旅順港が望まれた。出入りするロシア旅順艦隊の姿も目視できる。

――ここから港を砲撃してはどうか。

要塞の頭越しに、ロシアの艦船に砲弾を落とすのである。結果として、これが陸戦の趨勢を決めた。旅順港のロシア艦隊はほぼ全滅し、黒海から遠来のバルチック主力は帝国海軍を撃滅しなければ疲れを癒す寄港地がなくなった。これを得るために帝国陸軍が失った兵士は三万を越えた。

三

バルチック艦隊にとって旅順艦隊の全滅や遼東半島におけるクロポトキン軍の敗退は、なるほど暗雲に違いなかった。しかし艦隊を率いる中将ロジェストヴェンスキーは

――艦隊決戦では、勝つ。

と信じて疑わなかった。黒海を出てから六か月にも及ぶ無寄港遠征に兵は疲れていたが、士気は盛んだったし、三十八隻もの艦船が従っているのである。

一九〇四年五月二十七日午後一時五十五分から始まった艦隊決戦では、日本艦隊がとった敵前回頭という離れ業が功を奏した。真正面から進んでくるバルチック艦隊に、腹を見せたのだ。ロシア艦隊は艦首の砲しか使えないが、日本艦隊は

側面の全砲塔から轟音を発することができる。その代わり敵の砲弾を受ける確率も高くなる。

当時の世界の戦術からすると非常識極まりないことだった。

――一か八か。

であった。

連合艦隊司令長官・東郷平八郎がZ旗を掲げ、全艦船に向けて

――皇国の興廃この一戦にあり。

と訓令したのは有名な話だが、つまるところこの戦いに勝たなければ後がない、という切羽詰った決意表明でもあった。出撃を知らせる電文にあった「天気晴朗なれど浪高し」のほうが、東郷の本心に近かったのではあるまいか。

海戦は翌日も続き、ロシア艦隊は戦艦六、巡洋艦四、海防艦一、駆逐艦四、特務艦四を撃沈され、白旗を掲げた。

日本はますます自信を持った。

――オレは存外に強い。

と素直に思った。

新興国として、それはそれで当然であったろう。日本人が「日本」というものに自信を持ったとき、表立ってではないにしても「西洋」への反動が起こった。それが世相において、和洋折衷を促した。

筆者は、和洋折衷を揶揄しているのでなく、「西洋」というものがどういうかたちで日本の社会に浸透していったのかを眺めている。ここでいう「西洋」とは、都市化であり、消費経済であり、脱亜細亜であり、煎じ詰めれば「新しきを援け古きを挫く」という考え方であった。

これを思想・精神でとらえれば、一つは自由主義であり、また一つは資本主義であり、なおかつ軍事力と経済力が一体となったところに政治があるという帝国主義と言い換えることができる。明治初年において、それは一部の特権階級ないし、知識階級の独占物だった。

彼らは不平等条約の改正と富国強兵を旗印に「西洋」を模造した。東京のど真ん中に出現した鹿鳴館は、まさにテーマパークのような滑稽なものでもあった。

大日本帝国憲法と同期するように、「西洋」は物珍しいものではなくなった。田舎のちょっとした名家の子女は革靴をはき、西洋風の日傘をさし、人力車（これまた和洋折衷の典型だが）に乗った。商売人や農夫は荷車の代りに鉄パイプの枠とゴムタイヤをはいたリヤカーを曳き、商家の奉公人は和服に鳥打帽で都会の町を駆けた。

「コロッケ」という和洋折衷の食べ物が登場し、トンカツやカツ丼が発明された。ボート遊びや海水浴といったレジャーが開発され、修学旅行や社員旅行というものが始まった。カフェーやバーでは割烹着姿の女給が働き、子どもたちは駄菓子屋の店先にあるパチンコで遊んだ。

以下は雑学だが、パチンコという遊具は一九二〇年にアメリカで考案された「ガルバルディ」という名のゲーム機だっ

た。サーカスや興業団が町々に運び、見物人から小銭を稼いだのである。日本でいえば、温泉地にある射的場のようなものであろう。

これが日本に上陸して「コリントゲーム」という名前で輸入されるやたちまち普及し、「玉遊菓子自動販売機」として百貨店の屋上などに設置された。現今の大人を相手にしたパチンコ店の第一号は一九三〇年に愛知県に出来たのが最初とされている。

パーマ、劇場、レビュー、ダンスホール、活動写真、週刊誌、地下鉄、電気ブラン、竹久夢二、安田講堂、帝国ホテル、宝塚少女歌劇、チンドン屋、あんパン、大正琴……という中の一つに、計算機も入っていた。矢頭亮一、逸見治郎、川口市太郎、大本寅治郎もまた、そういう時代を生きていた。

～～～～～　補注　～～～～～

太平天国
中国の清朝末期、宗教結社「上帝会」の指導者である洪秀全（一八一四～六四、本名「仁坤」）が貧困階層の支持を得て一八五一年に建国した。南京を都として版図は華中・華南にわたり、共産的軍事組織を基盤として一八六四年まで存続した。
国号は「太平天国」が一般的だが、「真命太平天国」「天父天兄天王太平天国」とも称した。孔子の教えとキリスト経を混交した新興宗教教団であって、「天国」はキリスト教に由来している。

征韓論
一八七三年（明治六）、西郷隆盛、後藤新平らが唱えた。国内に充満していた士族の不満をもって朝鮮国への開国圧力に転じようとしたが、国内の改革を優先すべきとする大久保利通らが強く反対した。この論争に敗れた西郷らは政府を去り、不平士族の決起に結びついた。最大の騒乱は一八　七七年二月十五日に始まった西南の役（～同年九月二十四日）だが、西郷隆盛が明確な外交方針を持って決起したわけではなかった。

天津条約
十九世紀の天津は清帝国の外交窓口であったため、前後十七件の国際条約が同地で締結されている。史上最も著名なのは一八五八年に英仏露米四か国との間に結ばれた条約であって、これによって清帝国は①キリスト教の布教の自由②列強四か国の使節団の北京駐在③四か国人の国内往来の自由④開港・公益場所の拡大――などを約束した。
日本と清帝国が最初に結んだ天津条約は一八七一年の「日清修好通商関係条約」、次いで一八八五年に伊藤博文と李鴻章の会談で交わされた朝鮮国への干渉協定がある。

東学
一八六〇年に崔済愚（チェ・ジェウ／１８２４～１８６４）が創始した新興宗教で、儒教、仏教、道教を基礎に万民平等の太平天国を具現するとした。キリスト教（西学）に対して「東学」と称した。教義は迷信的だったが、民衆に広く支持を得て反体制運動に発展した。危機感を覚えた李王朝は一八六三年に崔済愚を「惑世誣民」の罪で処刑し沈静を図ったが、これが逆効果となって二代教主・崔時亨（チェ・シヒョン／１８２７～１８９８）のとき、ついに反乱（一八九四年、東学党の乱）となった。

斥倭洋倡義
倭（日本）と洋（欧米列強）を斥け義を倡（とな）えよ。ここでいう「義」は朝鮮国としての独自性ないし自尊意識を意味する。

ロジェストヴェンスキー　Zinovii Petrovich Rozhdestv　enskii／１８４８～１９０９。
ニコライ２世の侍従武官ののち海軍参謀長、軍令部部長をへて太平洋第二艦隊司令長官となった。日本海海戦で重傷を負い捕虜となった。

Z旗
国際信号旗ではアルファベットの「Z」を表わし、一字信号では「引き船を求める」または漁船が用いる場合は「投網中」を意味するに過ぎない。アルファベットの最後の文字であることから、ロシア・バルチック艦隊との決戦し際して東郷は〝背水の陣〟の意味を付与した。以後、大日本帝国　海軍ではZ旗がその意味でのみ掲げられるようになった。

日本IT書紀　030 興廃在此一戦

著　者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
http://www.ossaj.org/
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。